

教員養成プログラムとしての「野外教育論」の有効性

恵土孝吉¹⁾・大久保英哲¹⁾・佐川哲也¹⁾・池田幸應²⁾

Efficacy of a lecture "Theory and Practice on Outdoor Education" as Teacher Training Program

Koukichi EDO, Hideaki OKUBO, Tetsuya SAGAWA, Yukio IKEDA

Abstract

Outdoor activities together with peers play an important role in the mental and physical development of children. But, today, there are few chances for children to play outdoor. There is another problem that there are only a small number of teachers who have sufficient knowledge of outdoor activities.

This study examines the efficacy of the lecture, "Theory and Practice on Outdoor Education", which has given last two years as a teacher training program. In the academic year 1997, students learned outdoor activities such as striking fire from Maikiri, messtin cookout, Japanese snowshoes making. Almost students didn't have chance to experience before, they acquired fundamental knowledges and skills with impression. In 1998 academic year, this lecture held in combination with "Friendship Project for Teacher Training Course supported by the Ministry of Education". In this combined lecture, the students learned outdoor activities and taught them for primary school students as a leader. The result of the venture lecture showed the following efficacy; 1) outdoor activities are effective for education, 2) teaching experience on outdoor activity to children is effective for students of teacher training course to understanding children, 3) this lecture is a necessary program for teacher training curriculum.

Key words : Teacher training, Outdoor Education, Establishment of Subject

1. はじめに

平成8年度から金沢大学教育学部は大規模な改革を行った。その基本理念は変化の著しい社会の要請に答えて、学部学生定員をコンパクトにしつつ、(1)教育科学と専門科学を統合した研究者を養成すること。(2)教育実践の場における諸問題に的確に対応できる専門性をもった人材を育成すること。(3)多様なレベルで第一線の担い手として、また指導的な人材

を育成することであった。「課題別選択必修科目」とはそのような課題に応え、かつ今日学校教育で生じている「いじめ」、「差別」、「不登校」、「健康」などの諸問題を十分理解するとともに、メディア教育を通して十分教育機器の活用ができる人材を育成する目的で開設された金沢大学独自の科目群である。具体的には「人権教育」、「表現とメディア教育」、「環境と健康の教育」という3領域の科目群から成り立っている。

1) 金沢大学教育学部
〒920-1192 金沢市角間町

2) 金沢経済大学
〒920-8620 金沢市御所町丑10

1) The Faculty of Education Kanazawa University,
Kakumamachi, Kanazawa (920-1192)

2) Kanazawa College of Economics,
10 Utsi, Goshomachi, Kanazawa (920-8620)

本研究対象の「野外教育論」は免許法に定める免許状取得のための科目ではないが、上述した諸問題を十分理解し、対処できる人材を養成するために設けられた「環境と健康の教育」の一つであり、平成8年度から開講されたものである。

本研究は、過去2年間にわたって実施された「野外教育論」の教員養成プログラムとしての有効性について検討したものである。

2. 平成8年度「野外教育論」

2.1. 内容と実施方法

平成5年から実施された大学教育の大綱化によって従来のような「講義」、「演習」、「実習」の区分が比較的緩和されたのを受けて、「野外教育論」の講義回数計16回のうち、1) オリエンテーション、野外教育とは、2) ハイキングの理論と実際は、教室を使用した講義としたが、3) 火を起こす、4) 自然の中で生活(テント・ロープワーク)、5) 木や竹の採集と加工(竹馬・紙鉄砲)、6) 秋の医王山、7) レクリエーション・ゲームの指導、8) 野外炊飯の理論と実際、9) 野外のための技術、10) 雪に生きる、11) カンジキを作る・履くは演習、実習形式として実施した。このうち、3)、4)、5) は大学構内で担当教官が指導したが、7) は非常勤講師に依頼した。また、6) は近くの医王山に教官と学生とが一緒にハイキングを実施した後に、8) を実施した。なお、9)、10)、11) は冬季に指導教官が指導実施した。当初計画した「雪洞作り」については降雪量や時間の関係上実施する事ができなかった。

2.2. 対象学生

課題別選択科目「野外教育論」(2単位・16回)を履修した教員養成課程所属の大学1年生で、野外活動経験男子2名、女子1名、野外活動未経験男子7名、女子18名、計28名である。

2.3. 担当教官

担当教官は2名である。このうちA教官は年

齢58歳、教育歴35年、運動学専門の男性で体育科教育法、個人運動、スポーツトレーニングなどを担当し、野外教育は非専門家である。B教官は年齢47歳、教育歴20年、体育学専門の男性で体育史、個人運動などを担当し、野外教育は非専門家である。なお、サポーターとして年齢35歳、教育歴6年、体育学専門の男性教官一名が参加した。

2.4. 成績評価の方法

レポートまたは試験で評価した。

2.5. 結果(参加学生のレポートから)

レポートは、計16回の講義がすべて終了した後に自由記述で書かせた。初めて実施したために、授業内容の未整備や理論的な基盤の未確立など多くの課題があったにもかかわらず、学生の反応はおおむねこちらの予測を越えて好評なものであった。以下にそのいくつかを示す。

2.5.1. 学校教員養成課程 T・Y

「木と木の摩擦で火を起こす。いつもライターや電気コンロで気軽に火を付けている。今の私たちの暮らしの中でこのような原始的な方法はとても新鮮だった。方法はいたって簡単。木の摩擦によりできた火の粉をおが屑などで大きくし、火を木に燃え移す。文章で書けばそんなところである。しかし実際に体験してみれば、まず木の上下運動が上手く行かず、煙が出てくると気が焦ってすぐに木屑に移そうとして消してしまう。木屑に空気を吹き込もうとすると目に煙が入り涙が出る。全く着火しなかった。額に汗を滲ませながら作業したのも久し振りだった。勝ち負けのないこのような作業で悔しい思いをしたのも久し振りだった。最後に飲んだコーヒの味は格別だったが自分が起こした火ではなかったので屈辱の苦みがあった。みんなで一つのことに集中し、熱中するのはとても良い。アドバイスをくれる者もいれば、少し手助けをしてくれる者もいる。自然の中で仲間とこういうことができれば、教師から教えられることより

も自分たち、仲間同士で得ることの方が多
いのではないと思う。…略…。」

2.5.2. 学校教員養成課程 H・M

「金曜日の2限目は私にとって毎回楽しみな
90分でした。そもそもこの講義を受けよう
と思ったのは…(中略)…ただ座ってノートに
写すよりも、自分自身で体験してそこから学
び、その経験を将来活用したいと思ったから
でした。火起こしは…(中略)…もう感動も
のでした。何度も棒をまわして火種を作るの
にはかなり体力が要りましたが、…(中略)
…目の前にいきなり炎が出現したときは、驚
きと達成感が一緒になってバタバタとはしゃ
いでしまいました。また、その日、火起こし
器を実家に持ち帰ったところ父母が大変珍し
がり、庭で二人で火をを起こし始め、感動し
ていたのには更に驚きました。自分が経験す
ることでは自分が率先して他人に教えるこ
とが出来るとなると思っています。将来でき
れば希望している教師になって教えたい。こ
の講義からはひと味違った教を学び、大学
らしい授業を受けることができ凄く得をし
たと思えます。…略…。」

2.5.3. 学校教員養成課程 A・K

「授業の感想、何を書こうか分からなくなる
程この授業はバラエティに富んだ授業だった。
特に印象的であったのはハイキングでアケビ
を発見したこと。また、なめこを採り味噌汁
に入れて食した味は格別であった。…略…。」

2.5.4. 学校教員養成課程 A・U

「カンジキ作りは予想よりもかなり時間がか
ってしまったが自分の手で物を作る機会がほ
とんどないこともあって、カンジキを履いて
雪の上を歩いた時の感動は大きかった。講義
を終えた今の感想はとても楽しかった、の一
言に尽きる。…略…。」

2.6. 考 察

本授業のねらいは、現在学校教育に最も欠
けている教育方法論の一つである野外教育指
導のための基礎理論と基礎技能を習得するこ

とであった。この点に関しては非専門家によ
る手探りの状態から始めた授業計画ではあっ
たが、学生の反応は結果で示したように予想
以上の生き生きとした反応と好評なものであ
り、十分とは言えないまでも初期のねらいを
達成できたものとする。例えば、T・Yが
火を起こすことについて記述した点で、「方法
はいたって簡単…略…文章で書けばそんなと
ころである…略…しかし実際に体験してみれ
ば云々」と言うように思考と実際との差異を
実感したことは本授業の有効性としての好例
である。しかし、現在の教育現場に置かれた
学校病理や社会病理に対処できる能力という
観点から本受講生の実践的な指導力を考えれ
ば今一つ不足を感じる。実際に子どもたちを
引率して、ハイキングやレクリエーション・
ゲームの指導あるいは炊飯などが安全に効果
的に指導可能かと言えば、そのような能力は
甚だ乏しい。炊飯活動では火起こし器で火が
なかなか起こせず食べ終わるまでに約2時間
の時間を要したこと、あるいはレクリエーシ
ョン・ゲームについての体験が皆無であるこ
となどは、その例としてあげることが出来る。
今後の課題は、炊飯活動とレクリエーショ
ン・ゲームの体験はもとより、子どもたちと
実際に共同で作業する内容を盛り込んだ演
習・実習にすることが必要である。幸いなこ
とに、平成9年度「野外教育論」は文部省の
「教員養成学部フレンドシップ事業促進等経
費」(注1)の助成が受けられることとなり、
受講生は子どもたちを対象に「フレンドシ
ップ講座」(注2)を開講し、実際に指導するこ
とが可能となった。

3. 平成9年度「野外教育論」

3.1. 内容と実施方法

原則的には前年度と同じ内容としたが、今
回はフレンドシップ事業促進達成のために、
子どもたちと寝食共にする1泊2日の合宿(総
合学習)、天体観察と望遠鏡の使い方、報告書

作成（コンピューター学習2回）、教育委員会と共にフレンドシップ講座を振り返っての反省会を加えた。なお、実施方法は前年度とは大幅に異なり、学生を対象とした「事前授業」と学生が子どもたちと共に「本授業」（フレンドシップ講座、1泊2日）とに分けて行った。

事前授業は、フレンドシップ講座が10月中旬に実施されることから、正規授業（10月中旬）を繰り上げて行う必要があった。そこで、10月1日、2日に学生にあらかじめ火起こしをさせ、テント設営、野外炊飯などの技術的なことを1日半かけて集中的に指導し、フレンドシップ講座に備えた。但し、正規授業内容である他の項目すなわち、カンジキを作る、カンジキを履いて雪上行動（雪に生きる）は冬季に学生のみを対象に実施した。したがって、雪に生きるについては本稿では除くこととした。

本授業（フレンドシップ講座）は、事前授業で学習した内容とクラフト作り、天体観測、レクリエーション・ゲーム、感想文作成を加えた。実施場所は、教育委員会や大学所有の野外施設・研修所を利用した。指導は、大学生が2～3名一組で5～6名の子どもたちを受け持った。その際、大学教官や教育委員会主事などは学生の指導ぶりを観察し、子どもたちへの直接の主だった指導を避けた。但し、レクリエーション・ゲームの指導は主に非常勤講師に委ね、学生は補助的指導に加わった。子どもたちの募集は、石川県能美郡辰口教育委員会が地域の3小学校に案内し、応募した小学生40名を対象とした。

3.2. 対象学生

「野外教育論」科目を履修した教員養成課程所属の大学1年生で、野外活動経験者男子2名、女子2名、野外活動未経験者男子4名、女子14名、計22名である。

3.3. 担当教官

担当教官・サポーターは前回と同じであるが、この他に地域教育委員会関係者が3名、

養護教諭1名、レクリエーション指導員2名が加わった。

3.4. 成績評価の方法

前回と同じ方法で評価を行った。

3.5. 結果（参加学生のレポートから）

レポートは前回とは異なり、その範囲があまり広範囲にわたらないようにあらかじめ教官が3項目すなわち、設問1：小学生との交流を通しての感想、設問2：自然とのふれあいやクラフトなどの活動を通しての感想、設問3：班内のスタッフとの協力を通しての感想を設定しレポートを提出させた。表1に主な項目をレポートの内容の中からまとめて示した。また、レポートの一部分を以下に示す。

表-1. 設問と主な感想文

設問1 小学生との交流を通しての感想	
ア. 子どものパワーに驚いた	(8名)
イ. 子どもの行動や考えがよく理解できなかった	(6名)
ウ. 注意することができなかった	(5名)
エ. 指導ができなかった	(5名)
オ. 注意しても聞いてくれなかった	(5名)
カ. 子どもと仲良くでき楽しかった	(3名)
キ. 子どもにいじめられた	(3名)
ク. 疲れた	(3名)
ケ. 優しかったと言ってくれた	(3名)
コ. 質問に答えられなかった	(2名)
サ. 子どもに教えられた	(2名)
シ. 協力してくれた	(1名)
設問2 自然とのふれあいやクラフトなどの活動を通しての感想	
ア. 自然とのふれ合い・体験ができて嬉しかった	(10名)
イ. 火おこし、クラフトなどの指導が難しかった	(7名)
ウ. 行事に熱中してしまった	(6名)
エ. 御飯がうまうまできた	(4名)
オ. 御飯がうまうまできなかった	(2名)
設問3 班内のスタッフとの協力を通しての感想	
ア. 協力できた（大学生同士）	(18名)
イ. 協力できなかった（大学生同士）	(5名)
ウ. 仲間に迷惑をかけた	(2名)

3.5.1. 学校教員養成課程 H・Y

「自分たちの指示通りに動いてくれなかった場合に、注意を与えることは大変難しく、どうしても見過ごしてしまう傾向がありました。また、小学生をうまく指導することが出来ないと、小学生も何をしたら良いのか分からず、結局時間がかかってしまい、だらだらしてしまうことを学びました。…略…。」

3.5.2. 学校教員養成課程 K・M

「…略…フレンドシップ講座中は指導する立場より、一緒になって楽しんでいた気がする。いろいろな小学生がいて面白かったが、それを一つにまとめるとなるとかなりの重労働であることが勉強できた。…略…。」

3.5.3. 学校教員養成課程 Y・N

「私はテントを組み立てたり、野外でカレーを作ったり、竹馬に乗ったりという野外活動を今まであまりしてこなかったので、今回の体験は新鮮だった。…略…。今回の参加を通して小学校の先生は大変な仕事だと思った。小学生は言うことを聞かないし、いろいろ質問して来るし、おどおどしっぱなしであった。でも、「純粹なんだなあ」と感心することも多かった。…略…。」

3.5.4. 学校教員養成課程 K・F

「…略…フレンドシップ講座で強く感じたことは「小学生は元気だなあ」ということであった。あのパワーには若者の私たちでもついて行くことは難しかった。日中は勿論そこら中走り回って、なお夜中まで動き回っていた。…略…。私の周りには小学生くらいの子どもがいないので、「これが子どもなんだなあ」と実感した。でも、最初は戸惑った。まず、どう扱って良いのか分からない。それに、あれだけの集団ともなるとさすがに気が滅入りそうになった。列を乱す子もいれば、掃除をさぼる子もいる。よく見ればいじめっ子もいることが分かる。そういう時、私は単に怒鳴ってしまうけれど、それで良かったのかは分からない。先生稼業も大変だということが初め

て分かった。…略…。」

3.6. 考 察

今回の学習のねらいの幾つかは、(1)実際に子どもたちを引率したり、炊飯活動やテントを子どもたちと共に設営する中で、子どもたちに対して適切な指導を行うこと、企画運営の能力を養うこと、並びに、(2)子どもたちへの理解と交流であった。

(1)については学生たちのレポートに見られるように、子どもたちの活動力や予期せぬ言動に驚き、戸惑い、テキパキとした指示もまた適切な指示内容も十分ではなく、加えていたずらっ子の出現でパニック寸前の経験をした学生が少なからずあった。とりわけ教官の観察によれば、女子学生の身体にまつわりついてなかなか離れない子どもの出現で、女子学生はもとより男子学生も子どもたちにどのような指示を与えれば良いのか、あるいはどのように指導したら良いのか判断に戸惑いと躊躇が観られた。これらのことは入学半年後、それもほとんど専門教育、すなわち児童心理学や教育心理学等について未履修であり、事前調査からも理解できるように野外活動を通じて子どもたちとの触れ合い経験の希薄さや団体活動の経験不足等が主な原因と考えられる。

一方では、教官が子どもたちの安全や学生の資質等を考慮して、初対面でいきなり生身の子どもたち40名を預け、しかも野外での活動をさせることを考えると、初めてのことであり比較的予定された活動計画やプログラムを組まざるを得なかったことも関係しているものと考えられる。

(2)については、総じて子どもたちの行動や心理状態の把握が十分ではなく五里霧中でフレンドシップ講座を運営している傾向があったにしても、レポートに見られるように子どもたちへのある意味での理解や交流が深まりそして高まったことは事実である。

4. 総括

平成8年度から金沢大学教育学部改革に伴って体育教室では「野外教育論」を開講、そしてその発展的な授業形態としての「平成9年度文部省教員養成学部フレンドシップ事業促進等経費」を実施した。平成8年度においては初期のねらい、すなわち、現在学校教育に最も欠けている教育方法論の一つである野外教育指導のための基礎理論と基礎技能を習得させることは、参加学生のレポートから一応成功であったことが窺える。しかし現在の教育現場に置かれた学校病理や社会病理に対処できる能力という観点から、本受講生を判断した場合、大学1年生というこもあって不十分であった。この点を踏まえて平成9年度では「野外教育論」と「フレンドシップ事業」との合併授業を試みた。その結果、教官が比較的予定された活動計画やプログラムを組んだことや、野外活動未経験ということもあって、「フレンドシップ事業」の趣旨を十分習得させるには多少無理があった。とは言え、一方では3.6. 考察で示したように、子ども達への理解と交流については、学生たちの感想文を読むと、ある意味での理解や交流が深まり高まったことは事実である。また、大学、教育委員会、社会教育施設等の関係者からなる平成9年度シンポジウム「フレンドシップ講座を振り返って」の席上、ある学生から「子どもたちの心理について講義をして欲しい」という発言があった。教育心理学や児童心理学の重要性に学生が自らの体験を基に気付いたことは大きな収穫であったと言えよう。

今後の在り方としては、(1)野外教育論2単位の中でのフレンドシップ講座によって、フレンドシップ講座の趣旨を十分習得・発揮させるには無理がある。したがって本来の野外教育論は正規にじっくりと展開し、その応用演習として「野外教育論Ⅱ」または「フレンドシップ講座」を別途に開講することが必要

である。その場合、(2)天体観測や地形、植物、動物の知識、児童の心理や行動を熟知している学内外の他分野の教官との共同授業・事業とすることが現在の大学教育にとって重要かつ必要であると思われる。

(なお、本研究の一部は平成9年度文部省教員養成学部フレンドシップ事業報告書より引用した。また一部は本学会の第一回大会で発表した。)

注

1) 教員養成学部フレンドシップ事業促進等経費

教員養成大学・学部における教職を志す学生の教員としての実践的指導力育成に資するために設けられたもので、次のような留意事項を満たすことが必要である。

1. 留意事項

- (1) 教員の養成段階において、学生が種々の体験活動を通じて、子どもたちとふれあい、子どもたちの気持ちや行動を理解し、実践的指導力の基礎を身につけるような機会を設けること。
- (2) 上記(1)の趣旨を内容とする授業科目を開設すること。
- (3) 都道府県・指定都市教育委員会等と連帯・協力すること。

2. 経費の対象の内容

- (1) フレンドシップ事業の実施
- (2) 大学、教育委員会、社会教育施設等の関係者からなる企画運営協議会を設置すること。
- (3) 大学、教育委員会、社会教育施設等の関係者からなるシンポジウムを開催すること。

2) フレンドシップ講座

趣旨…「野外での生活、工作や遊びの体験を通じて、自然の力や素朴な道具の持つ役割を理解し安全に指導する能力を見につける。また、小学生たちとの共同生活や交流を通じて子どもたちの理解を深めるとともに集中力、

チャレンジ精神、協力することの大切さを体験し、社会生活の基本的な行動や様式を理解し、また、指導できる能力を身につけること」である。

参考文献

- 1) 江橋慎四郎 (1998) : 野外教育の理論と実際, 杏林書院
- 2) 金沢大学教育学部・辰口教育委員会 (1998) : 金沢大学教育学部「平成9年度文部省教員養成学部フレンドシップ事業」報告. 金沢大学教育学部・辰口教育委員会
- 3) 佐野 豪 (1993) : 高齢者のためのレクリエーションワーク, 不昧堂
- 4) 日本野外教育研究会 (1994) : 野外活動テキスト, 杏林書院
- 5) 日本野外教育研究会 (1989) : ティーチングインザアウトドアーズ, 杏林書院
- 6) 日本野外活動団体協議会 (1988) : 野外活動同マニュアル, 杏林書院
- 7) 池田 勝 (1989) : レクリエーションの基礎理論, 杏林書院